

野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

ヤマトリカブト *Aconitum japonicum* Thunb. subsp. *japonicum* (キンポウゲ科 Ranunculaceae)

秋も深まり、山歩きに最適な季節を迎え、野山を歩いていると紫色の烏帽子のような花を付けた植物を見かけます。これは、一般に「トリカブト」と言われる有毒植物です。トリカブトは総称名でその仲間は、我が国に自生しているだけでも約40種あり、関東に自生しているのは、ヤマトリカブトと言われる種類で、関東北部から東北・北海道に分布しているのはオクトリカブトと言われるものです。トリカブト類は分類が非常に難しいのですが、植物の分布域、花序が有限的（花が上から下へ咲く）か、無限的（花が下から上へ咲く）か、茎葉の分裂の仕方が3全裂か3深裂か、花柄に毛があるか否か、毛があるとすれば、どのような毛なのかに注目して分類します。

ヤマトリカブトは関東地方の山地に生える4倍体種で、花柄に曲がった毛が生える種類です。茎は高さ0.6～2m、林縁では斜上、草原では直立し、葉は3～5中裂と切れ込みが浅いのが特徴です。花は長さ3～4cm、散房花序につき、上から順に咲きます。トリカブト亜属では、塊根は母根（烏頭）と子根（附子）に分かれ、春になると母根に着く冬芽から芽を出して成長し、秋に花を咲かせます。春に母根から芽を吹くと、非常に短い地下茎を出し、その先に子根の形成を始めます。母根は秋に花を咲かせ、実を結ぶと枯れてしまうので、疑似一年草と言われます。生薬を附子（ブシ、*Aconiti Tuber*）または烏頭（ウズ）と呼びますが、産地、原植物あるいは加工処理の違いにより炮附子、塩附子といった種々の呼び名があり、第17改正日本薬局方では、ハナトリカブト *A. carmichaeli* Debeaux 又はオクト



写真1 ヤマトリカブト（花）



写真2 ヤマトリカブト（果実）



写真3 ヤマトリカブト（塊根）



写真4 生薬：ホウブシ（炮附子）

リカブト *A. japonicum* Thunberg の塊根を高圧蒸気処理、食塩等の水溶液に浸せき後、加熱などの処理を施した（修治）ものをブシ（加工ブシ）として収載しています。ハナトリカブトは国内で栽培され、花屋等でも切花として店頭に並びます。また、ブシは狂言の「附子（ぶす）」という古くから演じられてきた演目（太郎冠者と次郎冠者が水飴を食べた話）にも登場します。薬用としては、アコニチン系の猛毒アルカロイドを修治によって分解するところに意味があり、漢方では減毒加工されたものが盛んに使われる重要品で、新陳代謝機能の劣えた人に興奮、鎮痛、強心、利尿薬などとして、八味地黄丸、牛車腎気丸、真武湯などに配剤されます。成分には有毒物質として aconitine をはじめとするジテルペン系アルカロイドがよく知られています。これらの有毒成分は塊根だけでなく、植物全体に分布し、春先、ニリンソウやヨモギなどの山菜と間違えて食した食中毒事故が後を絶ちません。取り扱いにはくれぐれも注意が必要です。漢方薬として調合されたもの以外は家庭で用いないで欲しいものです。

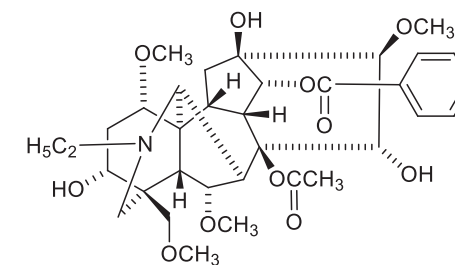


図1 aconitine の構造式